
女は皆そうする！？

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女は嘘をつくる！？

【Zマーク】

Z6668K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

モーツアルトのオペラを観た政行は恋人の恵子もそうなのかと思ってしまう。その彼女の返答は、ちょっと駄目な彼氏と無口でしつかり者のヒロインです。

女は皆そうする！？

ヨシ=フラン=エヴァン。モーヴィルトの有名なオペラだ。

これを高校の芸術鑑賞で見た。流石に日本語だがそれでもかなり局向な二二三はらつ二。

「うちの学校ってそんなに金あるのか?」

「こんなの平氣でやれるんだからあるんだろ?」

観客席の中から「んな声が聞こえてくね。彼等は今市のホールの中にいてそこで舞台を見ているのである。舞台では歌手達が歌っている。

「おもろい、でも人選はだ」

「ああ、うひのば

この学校はエスカ

や大学院まである。

その歌麿部の人達たよ

ପାତା ୧୦୦

「それでモーティアルトか。ええと、『ジガアツテウマイ?』

「 ハシ=ファン=トウツテな」

言葉が訂正された

えるのか」

- そ う い う い な -

「女に舐めやがれだ」

「成程な」

「こんなものなんだな」

「女は魔物なんだな」

実によく言われる言葉も「」で出て来た。

「そういうことか」

「そうなると」

「こんな話をしているのだからだ。自然に自分達のことに思いを馳せるのであった。

「まさか俺のも」

「俺のも」

「だよな」

「こう話していくのであった。オペラを観ながら。

「そうなるとな」

「油断したら危険だよな」

「そうだな」

「そんな話をしていたのだった。そしてである。その中に一人いた。彼の名は伊藤政行といふ。

おつとりとした顔をしており田元が特に優しい感じである。一重であるが目の光が優しいのだ。そして黒い髪をやや長くしており黒い眉はそれ少し上に向いている。何処か中性的な顔をしていてそれもかなり印象的である。そんな彼も今オペラを観ているのだった。

「うわあ、何ていうか

そのオペラを観ながら言つ彼であった。

「これって凄い話だよね

「有り得ないって

「なあ

周りではこんな声もあった。

「つていうか展開早過ぎだろ」

「一日でこうなるか?」

「」のヒロイン二人どれだけ流れ易いんだよ

いは言ひしがしであった。こんな風にも言ひのほは彼等も同じだつた。

「何かよ、こうしたことってな

「やつぱつあるよな

「だよな、これって

「なあ

そんな話をするのであつた。そして政行もある。それは同じ考えであつた。

「俺もまずいかな

「つていうか伊藤よ

「御前の彼女つてあれだつたよな

「ああ、あれだよ

言ひながら後ろに方をちらりと見る。そこには黒い髪を肩の長さにしていてクールな目をした小柄な女の子がいる。席から見えなくなりそうな程小さい。しかも童顔である。

「あの娘だけれどよ

「清浦恵子ちゃんなあ

「御前も趣味変わつてるよな

「変わつてるつて?」

周りからそう言われた政行はまづその中性的な顔を顰めさせたのだった。

「そうかな

「ああ、変わつてる

「断言できるよ

「なあ

周りは言つのであつた。

「だつてよ。何を考へてるかわからぬいしな」
「そりだよな」
「ポーカーフェイスだしな」
「無口だしな」
「彼女の性格である。そりしたじとじで有能なものである。
「そんな相手だけれどな」
「まさか清浦もって」
「そり考へてるのか?」
「ひよつとしたら」
「実際にその考へを見せる彼であつた。
「やつぱつあるよな、それつて」
「まあゼロじやないよな」
「清浦だつて女だしな」
「それを考へたらな」
「周りはひそひそと話す。そのオペラを観ながら。
政行もである。オペラを観ながらだ。あれこれと考へるのであつ
た。
「ああして結婚式とかになつたら」
「だよなあ。これつて男はかなりへこむぜ」
「ほり見ろよ、お互に内心かなり怒つてるじゃねえか
「気持ちはわかるな」
オペラの中では男達は信じていた婚約者がそれぞれ何だかんだで
他の男になびいてしまつてゐるのを見て怒りを爆発させてゐる。政
行も皆もそれを見て嘔つのであつた。
「これはかなりな」
「やばいよな」
「実際に起つたらな」

「ああ、やつだよ」

「ここでまた言つ彼等だった。

「Jの事態はな」

「我が身になつたらな

「嫌なんてものじやないぜ」

「あいつもまさか

こんなことも思つ政行だつた。

「ひょつとしたら」

只のオペラには思えなかつた。そうしてである。彼はオペラを觀終わつてから何となく浮かない氣持になつてしまつたのである。教室に戻る足取りが何処か重い。

その恵子と横に並ぶ。政行の身長は一七〇程度である。とりあえず普通といったところだ。その彼の横にいる恵子は三十センチ近く低い。相当な小柄である。

その恵子があるので。ぱつりと言つてきたのだ。

「凄い話だつた」

「えつ、あれつ！？」

恵子がいきなり言つてきたので驚きの声をあげてしまつた。

「今喋つた！？」

「喋つた」

まさにその通りだと返してきた恵子であつた。

「それがどうしたの」

「い、いやや」

「あのオペラだけれどさ」

「ああしたことはあるから

政行の心を見透かしている様な今の言葉であつた。

「私も気をつける」

「あ、ああ。そうなんだ
「私は伊藤の彼女だから
「自覚あるんだ」

「ある」

それはあるところである。
「だから気をつける」

「そ、そなんだ」

「けれど」

そして恵子はさりげに言つてきたのであった。

「それは伊藤も同じ」

「俺もなんだ」

「そう、気をつける」

「いい？」

「あ、ああ」

戸惑いながら答える彼だった。

「セベナ」

「わかってるならいい」

それなりとお詫びをした。

二二二

卷之三

二二

גַּםְלָנִים

「男もなんだ」

「そう。女も男も同じ」

そうだと。表情を変え

「私それよく知ってる」

知つてゐん

卷之三

：おまかせください

「わかるつて。あのさ

「だから野も皆そいつする」

この言葉を再び語ってきただのである。

「わがよくなれか」

ニニがハナ

所悪いに泣せないといふ

「ノルマニエヌ」

のは真夜中

גָּדוֹלָה

「私だけ」

実にあからさまな誘惑の言葉でもあった。実際に恵子は誘つてもきていた。

「どう?」

「家に来いつてことだよね、それって

「その通り」

やはりそうであった。

「それでわかるから」

「あのさ、それってつまり」

「沢山言わない」

政行が言うのを先に止めてしまった恵子だった。

「どうか女の子に言わせない」

「あつ、そうだね」

恵子に言われてそれで引つ込んだ政行だった。その無口でクールな調子の言葉がかえつて威圧感を出しているのであった。この時点で負けっていた。

「それじゃあ今日なんだ」

「そう、今日」

まさに今日だといつのである。

「わかつたわね」

「わかつたよ。じゃあ

「女は嘘うする」

またこの言葉が出て來た。

「それ嘘だから」

「はあ。そうなんだ」

そんな話をしたのであった。政行はクラスに戻つて自分の席であれこれ考えたのであった。するとそこには皆が來たのであった。

「おいや、何だよ」

「喧嘩したか?」

「清浦とよ」

「家に呼ばれた」

そうだといつのである。

「物凄いことになつた」

「つて御前等まだそこまでいつてなかつたのか?」

「付き合いだしたの結構前じゃねえか」

「それでもか」

「家に行くのははじめてなんだよ」

「そうだつたといつのである。」

「実はさ。それに」

「それに?」

「今度は何なんだよ」

「あのオペラな」

さつき観たそのオペラのことでも話題に亘つたのであつた。

「その」とも言つてきたしな

「あれな

「あのオペラな」

「それが本當かどうかつて」「いやしこんだよ」

「それだといつのである。」

「向ひうが言ひこな

「向ひうが言ひこはか

「清浦がかよ」

「あいつ何考えてるかわからないうじいがあるからな
首を捻りながらの言葉であつた。

「どうにもな
「ああ、清浦な
「あいつはかなりな
「ミステリアスっていうかな
「何考てるかわからないからな
恵子の評価は政行と周囲で大体同じである。実際に彼女は成績優秀でもあるがそれ以上に訳のわからないところがあるものである。
「どうにもな
「これはな
「さて、どうする?」
「清浦の家に行くんだろ?」
「ああ、行く」
それはもう決めている彼であった。既にである。
「それはな
「まあそうしる
「行かないと話がはじまらないからな
「だよなあ。さて、どうなるのかな」
期待以上に不安が大きかつた。そのうえで恵子の家に向かうのであつた。彼女の家はマンションにあつた。その三階に向かいダークレッドの扉の前でチャイムを鳴らすとであつた。グレーのセーターの上にワンピース状の黒いロングスカートを着た彼女が出て來た。
「いらっしゃい
「あつ、うん
「用意できるから
こう言つ恵子だった。
「入つて
「それじゅあ

こうして政行は恵子の家の中に入つた。まず案内されたのはリビングだつた。木の廊下を進んでそのままリビングに入るとだつた。恵子はすぐテレビをつけてきた。

「テレビ?」

「DVD」

「一言」であった。

「それ観るから」

「DVDなんだ」

「モーツアルトのオペラあるから」

「モーツアルトなんだ」

「そう」

またモーツアルトであつた。学校に続いてである。

「それじゃあ」

「あのオペラだけじゃなかつたんだ」

政行はそれを聞いて少し意外な顔になつたのだつた。

「モーツアルトって」

「モーツアルトは天才」

恵子はDVDのスイッチ等を入れて実際にディスクも入れて動かしてからそのうえで彼の横に座つてきた。二人並んでそれぞれのクッションの上に座つている。

「天才だから」

「他にも作品あるんだ」

「ある」

まさにあるのである。

「これも」

「あれつ、この曲は」

最初にかかつたその曲を聞いて言つ彼だつた。

「聴いたことあるよ、この曲

「フィガロの結婚」

恵子は静かに言つてきた。

「それの序曲」

「あつ、フィガロの結婚つていつたら
「やっぱ。それもモーツアルトの作品」
「そうだといふのである。

「そうなの」

「そうだったんだ。それにしても
「どう?」

「いや、これもいい作品だよね」

音楽と歌と聞きながらの言葉である。

「とも」

「モーツアルトは天才」

また言つ恵子だった。

「だから」

「そうなんだ。つていうか
「つていうか?」

「天才とかそういうの理由にならないじゃないかな
それを言つのである。」

「あのや、女は皆そうするだよね
「そう」
その話をするのである。
「それがわかるから
「そなんだ」
「最後まで観ればわかるから
言いながらこのオペラを観るように話す。
「それじゃあね
「うん、じゃあ
「うん、じゃあ
こうして観ながらであった。じつと観ていく。そうして話が進む
とであった。
「あれっ！？」
思わず声をあげた政行だった。
「これって
「ヒロインは裏切らない
「そうだね、強かだし芯は強いし
しかもである。
「何かヒロイン側はどうちも。それに
「男側はどう?
「伯爵って
「伯爵って」
このオペラでかなり重要な人物である。アルマヴィーア伯であるが浮氣者であり尚且つかなり諦めの悪い人物なのである。それでいて気品もあり堂々としている。モーツアルトの作品特有であるがキャラクターが非常に魅力的であり光をえられているのである。
「何か凄い浮氣者だし
「主人公のフィガロも迷う
「そんだね」

主人公も自暴自棄になつてやつした行動を取るのである。

「何か見ていたら」

「そつ。女の子は動かない」

「心はだよね」

「それで」

「ああ」

話を観ていくとだつた。最後にはだ。
ハッピーヘンドであつた。女が主導した大団円なのだつた。
そこまで観て政行は。静かにこつり言つた。

「ええと、これも」

「そう」

そして恵子も言つてきた。

「これも女なの」

「そつなんだ。同じ作曲家の作品でこんなに違つんだ

「あれも女これも女」

恵子の言葉は続く。

「一つの作品だけじゃ言えない

「そつみたいだね。本当にね」

「他の作品もある」

そして恵子はさりに彼に言つてきたのであつた。

「後宮からの逃走。それはどうあるの？」

「どうつて」

「時間ある？」

それも問つのを忘れない恵子だつた。

「あつたら」

「ええと、まあつちの門限つてね」

政行はそれを言われて頭の中でそれをチェックしながら答えた。

「終電までなんだけれど」

「じゃあいける?..」

「ええと、どうじようかな

「わかつたらいいけれど」

譲歩めいた言葉も出して來た。

「それで」

「ええと、それじゃあ

「他のことでも確かめられるし」

迷いを見せた政行に対して、攻撃を仕掛けた。

「他のことでも」

「他のことって？」

「今、一人きり」

これまで以上にぼつりと言つた恵子だつた。

「お家の中に一人きり」

「つてことは」

「シャワーもあるから

語ると頬が赤くなつてきていた。

「だから」

「つまりは」

「これ以上言わせないで」

今度は顔が真つ赤になつっていた。まるで林檎の様である。

「恥ずかしいから」

「じゃあ今からだよね」

「うん」

その真つ赤になつたままの顔で答える恵子だつた。

第六章

「私はいいから」

「それじゃあ」

「こうして政行は恵子自身でそのことを確かめたのであった。そして次の日。皆昨日のオペラの話をまたしていた。彼もそこに来たのである。

「ああ、浅原よ」

「御前はどう思うんだ?」

「俺かい?」

「こう登校してきた彼に対しても皆で問いつてきたのである。

「昨日のオペラな」

「コンナコトナラシナケレバのことだよ」

「コシ＝ファン＝トウツテだよ」

「人が間違えてもう一人が突っ込み返す。
「何か間違えやすいタイトルだけれどな
「つていうか覚えにくいで」

こんな話の後であった。話が再開された。
「まあとにかく」

「昨日のあのモーツアルトのオペラな」

「あれどう思うんだ?」

「その話をするのであつた。

「あれつてよ。どうなんだ?」

「女つて皆ああなのか?」

「御前はどう思うんだ?」

「そりなんじやないかな」

まずは微笑んでこう述べた政行だった。

「それはさ」

「おい、やうなのがよ」

「女つてやつぱりそつなのかよ」

「浮氣者なのか？」

皆彼の言葉を聞いて焦つた様な顔になつた。狼狽さえ見せてゐる。

「男はああして振り回されて」

「悲惨な目に遭つたのかよ」

「けれどそれだけじやないよ」

しかしここで政行は笑つていつもいつのであった。

「それだけじやね」

「えつ、それつてどうこいつなんだよ」

「それつてよ」

皆彼の今の言葉を聞いて今度は混乱した顔になつた。

「それだけじやないつてよ」

「浮氣するんじやないのか？」

「浮氣するのは男だつて同じだし」

彼はここでは昨日のフィガロの結婚のことを思い出していた。そのつえで皆に対してもつてゐるのである。それはかなりはつきりとした言葉であった。

「それによ」

「それによ？」

「何だよ、それつて」

「女の子の中には一途なものもあるよ
」いつも言つのである。

「ちゃんとね」

「浮氣するんじやないのか？」

「だからコレカラドウナツチマウンダつて」

「コシ＝ファン＝トウツテだよ。いい加減に覚える」

同じ人間が間違えて同じ人間が突つ込みを入れてゐる。どうも人によつてはかなり覚えにくいタイトルのオペラであるようである。

「ああ、それでな」

「話を戻してな」

「ああ

」この間違いは置いておかれでまた話されるのであつた。

「女は皆そうする」

「そうじやないのか?」

「だからそれは一面なんだって」

政行はこことして皆にこの話をのだつた。

「あくまでわ。一面だけなんだって」

「一面だけって」

「じゃあ浮氣するのも一途なのも女つてことかよ」

「そうだよ。それは人と時と場合によつても違うしね

一つだけではないところがあるのである。

「一概には言えないよ」

「そうなのか

「そんなものか」

「そうだよ。断言はできなこよ」

」う達觀した様な言葉で答えるのだった。

「中々ね

「何か随分わかつた様なことを言つたな

「?ひょっとして御前

「昨日だけれどよ

「まさか

」歯こので政行のことに築いたのだった。この辺は中々察しがい

い。

「清浦の家で」

「あいつと

「それでか?」

「ははは、それはさ」

これまでよりさらに強く笑つての言葉であった。

「まあ内緒つてことでね」

「ちつ、これだから彼女持ちはよ」

「顔だつてつやつやしてゐしよ」

「羨ましい奴だぜ」

「うつ言つてさも羨ましそうひ言つて面々だった。実際にその言葉には嫉妬が混ざつてゐる。

「まあそういうものなんだな」

「女は皆そうする」

「これつて一面でしかないんだな」

皆このことをあらためて確かめるのだった。

「つまりは

「そういうのとか」

「そういうことだよ。男だつて同じだしね」

またこう言う政行だった。

「だからね。そんなに決め付ける」とはないよ

「そうか、それだつたらな」

「それでな」

「うつ割り切ることにした男達だつた。そしてうつで。政行を後ろから呼ぶ声がした。その声の主は。

「工藤」

「ああ、清浦」

恵子だった。彼は笑顔でその声の方に振り向く。するとついに彼女が立つてゐる。

「いいかな」

「うん、何かな」

笑顔で彼女の方に向かう。女は皆そうする、されど女は一途でもある、そうした矛盾することがわかつた話であった。さわやかであるがかなりの大騒動もこれで終わつた。

女は皆そうする…？

完

2
0
1
0
•
1
•
1
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6668k/>

女は皆そうする！？

2010年10月8日15時12分発行